#### Bill Evans:Rare Transcriptions 2

Song Recording

1..I Hear A Rhapsody(with Jim Hall) Undercurrent

2.Skating In Central Park

3. Night And Day(with Stan Getz) Stan Getz & Bill Evans

4.Green Dolphin Street(with Miles Davis)
5.Flamenco Sketches(with Miles Davis)
6.Autumn Leaves(with Jeremy Steig)
What's New

7. You And Night And Music

8. Summertime

9. My Foolish Heart

10. Round Midnight

Green Dolphin Street

How My Heart Sings

Turn Out The Stars

Bill Evans Trio Live

11.GoodbyeAutumn Leaves12.Danny BoyBill Evans Solo

13.Never Let Me Go Alone

# "I Hear A Rhapsody"

★ギター: ジム・ホール/★ピアノ: ビル・エヴァンス

# Jim Hall(g) & Bill Evans(p)

●採贈と解説: 布川俊樹(ギター)、及川かほる(ピアノ) そうして"インターフ"レイ"は生まれた

ぼくは、自分が死んだ時に葬式でかけても らいたいな、と思う音楽がふたつあります。 マイルスの『マイ・ファニー・ヴァレンタイ ン』と、この珠玉のデュオ、『アンダーカレン ト』です。ジャズ・ギター・アルバムでは、 ウェスの『ハーフ・ノート』と、ジョン・ス コの『ライヴ77』、そしてこの作品がぼくにと ってのベスト3でしょうか。とにかく、この 作品ほど情感溢れるギター演奏をぼくは他に 知りません。哀しみ、冷たいリリシズム、強 さ、ストイックとも言える抑制力、このアル バムの印象をあげていくときりがありません。 その中でも最も強く感じることは、彼らの美 意識とそれを徹底的に遂行する意志です。ふ たりの意志のエネルギーの強さが、あの張り 詰めた緊張感ある"時空"を生み出します。 「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」を除くと、 ほとんどバラッドっぽい曲ばかりで、普通だ ったらかったるくなるところ。しかし、彼ら の演奏は、スロー・テンポやルバートでもピ

ートがビシッと決まっていること、ふたりと も、徹底的に自らの置かれている状況とそれ に対する行動が見えている(要するにさめて いる)こと、プレイのスピード (手が速く動 くということではなく、瞬発力ということ) の速さなどから、まったくだれた感じがしま せん。その中でもLPの最初の3曲(A面に あたる)は、完璧です。「マイ・ファニー・ヴ ァレンタイン」の信じられないほどの緊張感 ある演奏が終わった後で、同じキイの「アイ・ ヒア・ア・ラプソディ」のテーマをジム・ホ ールが弾き始める瞬間、何度聴いても胸がつ まります。みなさんも、もし聴いていないの なら、とにかく一度聴いてみてください。そ れからCDの曲順について一言。「マイ・ファ ニー~」のオルタネイト・テイクを1曲目に 入れる神経は信じられません。あのアルバム の完璧な構成を考えたら、オルタネイト・テ イクは絶対に最後の方に入れるべきでしょう。



「コンプリート・アンダー カレント/ビル・エヴァンス&ジム・ホール」 (東芝EMI CD:TOCJ-5354)

#### (譜例解説)

さすがにビル・エヴァンス。実に美しいコード進行がつけられている。普通と少しちがうのは、5~6小節目、|Fm→Abmr|Bmr→Bbr|と短3度で上がっていく部分、15小節目の3拍目にBbmrへ行くところだろう。ジム・ホールのフレイジングをみても、このコード進行があらかじめ決められていたことがわかる。ただ、これは、このスロー・テンポだからよいので、いわゆるミディアム、4ビートのテンポの場合、コードの動きがせせこましくなってしまうかもしれない。

ジム・ホールは、1コーラス目のテーマの 国の部分をフェイク気味に、2コーラス目は サビの国の部分からソロに入り、最後の国で テーマを弾いている。短いながらも、彼の"う たい方"のエッセンスをぼくはこの演奏に感 じてしまう。

〈布川〉

# I Hear A Rhapsody/Jim Hall & Bill Evans





m· S я T н A х N я D > A я R - D к .



# "I Hear A Rhapsody"



121

\*\* S f T f A a N f D a R f R f R

# "I Hear A Rhapsody"



# Skating In Central Park

スケーティング・イン・セントラル・パーク/ビル・エヴァンス(p)&ジム・ホール(g)

採譜:石澤功治(ギター)&松井玲央(ピアノ)

解説:石澤功治

ニューヨークに因んだ曲ということで、「A列車でいこう」に続く第2弾はビル・エヴァンス(p)とジム・ホール(g)のデュオによる1962年の大名盤『アンダー・カレント』から。作曲はMJQのジョン・ルイス。ピアノとギターの巨匠ふたりが、しっとりと、それでいてメリハリのあるワルツに仕上げている。冬のセントラル・パークの美しさを叙情的に表現し、加えて3拍子に乗って滑らかにスケートしている様を連想させる見事な演奏だ。

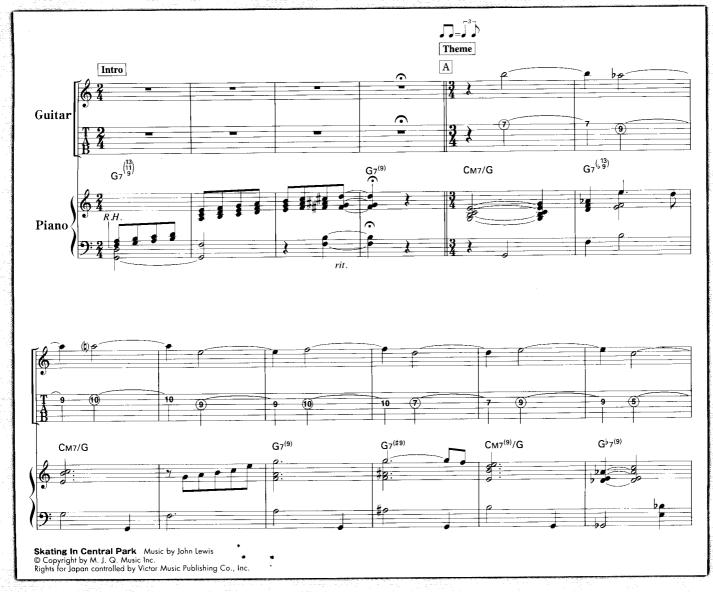
曲は64小節で1コーラス。イントロ4小節に続いて風~回がギターによるテーマ、固からがアドリブとなっている。譜面は、誌面の都合上アドリブの1コーラス目までとなっているのでご了承いただきたい。なお、コード・ネームはバッキングを担当している楽器の上に記した。

Guitar:無駄な音を一切弾かないジム・ホール のスタイルに改めて感服である。また、匠と田で の豊かなヴォイシングによるパッキングも卓越。 一方、アドリブでは8分ウラによる強力なシンコ ペーションに注目してほしい。

Piano:イントロはルバート的だが、ここでは2 拍子で記してみた。テーマの8小節目2拍目はギターのオクターヴにも聴こえるが、ピアノとギターがそれぞれC音を弾いている。こういったところから、ふたりがプレイ前に綿密な打ち合わせをしたと思われる。国の最後の小節はホールトーンによる音使い。Cの最後はGの上にEb、Dbのメジャー・トライアドを乗せたアプローチ。



収録アルバム |アンダーカレント] ビル・エヴァンス(p)& ジム・ホール(g) 東芝EMI(Liberty)TOCJ-9337



# Skating In Central Park



### スケーティング・イン・セントラル・パーク



# **Skating In Central Park**



### スケーティング・イン・セントラル・パーク



# Skating In Central Park



# "Night And Day"

★ピアノ:ビル・エヴァンス

## Bill Evans (p)

●採譜と解説:及川かほる

### 流れるようなピアノの単旋律

エヴァンスを聴くたびに…… この人、どうして死んじゃったんだろうなぁ…… とつくづく思う。今生きていたら、どんなプレイをしていただろう? ほんとうに多彩なプレイを見せてくれる人で、聴き込んでいくほどにその"すごさ"を痛感してしまう。

スタン・ゲッツと共演している、この「ナイト・アンド・デイ」でのピアノ・ソロは、とにかく徹底的にブレイクを使っているのがおもしろい。最初の1コーラスは、8小節ご

とのブレイクを延々繰り返している。8小節 ごとにバッキングがピタっと止み、ピアノの 単旋律が流れるのは妙に気持ちの良いものだ。

ブレイクしている間のフレイズは、聴いていてコード進行の察しがつくような、比較的インサイドなものになっている。わかりやすく言えば、コード・トーン主体の連続フレイズで、特にそのコードの3rdと7thは外さないカッチリした構成である。

それとの対比で、交互に出てくる通常のソ

STANGETZ SBILL ELANS

『スタン・ゲッツ&ビル・エヴァンス』 (ポリドール CD: POC J-1829)

ロの部分はブロウクンだったりするが、そんな時も、軸音が順次進行していたり左手が規 則的なバッキングを刻んでいたり、と、必ず どこかで流れを作っているのがわかる。

まぁ、エヴァンスのプレイに関しては、たいていどれを聴いても納得してしまうのだが、この「ナイト・アンド・デイ」でのソロも、なかなかの納得モノですょ!







新 $\cdot$  S 月 T 刊 A ス N タ D ン A タ R — D ド



# "Night And Day"



### 新· S 月 T 刊 A ス N タ D ン A タ R - D ド

**★サックス:スタン・ゲッツ**。

### Stan Getz(ts)

#### ●採譜と解説:佐藤達哉

### ゲッツに似合うスタンダード曲

これから夏にかけて、曲名の通りのさわや かな雰囲気を持つ曲「ナイト・アンド・デイ」 をとりあげるのはなかなかタイムリーだと思 うのだが、コール・ポーター作になるこの曲、 ヴォーカリストやピアニストによる演奏が多 く残されているわりには、サックス奏者によ る演奏はあまり見当たらない。テナー奏者ス タン・ゲッツとピアニスト、ビル・エヴァン スによる『スタン・ゲッツ&ビル・エヴァンス』 や、同じくジョー・ヘンダーソンのアルバム 『インナー・アージ』が思い浮かぶくらいなの だが、先月自己のクァルテット「クエスト」を 率いて来日を果たし、さらに磨きのかかった 「エグい」サウンドを聴かせてくれたソプラノ 奏者、デイヴ・リーブマンがこの「ナイト・ア ンド・デイ」のコード進行をベースに、モダン なメロディを乗せて書いた名曲「デイ・アンド ・ナイト」なんていうシロモノもあるにはある。 ちなみにリーブマン(Liebman) のオリジナ ルの中には、「枯葉」のコード進行を基にして 書いたレイジーな、そして美しいメロディ・ ラインをもつナンバー、「オータム・リーブス」 (Autumn Liebs)という曲もある。こういっ たぐあいに、既成の曲のコード進行を使って 新しいオリジナルを作曲した場合、ジャズ・ メンはかなりシャレてタイトルを付けている。 思いつく例として、ジョン・コルトレーンの 「サテライト」(衛星)。この曲は「ハウ・ハイ・ ザ・ムーン」のコード進行を基にしているの だ。同じくコルトレーンの「カウント・ダウ ン」。これはマイルス・ディヴィスの「チュー ン・アップ」を基にしているのだが、これは カウントもチューニングも演奏の直前におこ なわれるというところからネーミングされた のではないだろうか?

話が横道にそれたので、本題に戻そう。今 月の課題曲、「ナイト・アンド・デイ」はスタ ン・ゲッツの演奏をとりあげてみたい。

日人ジャズ・プレイヤーの頂点に立つふたり、スタン・ゲッツとビル・エヴァンスの唯一の共演をとらえたこの演奏は、録音後まもなく発売されたわけではなく、なんと10年間もオクラ入りをして、未発表シリーズのような形で発表されたのだ。この夢のような共演は、レニー・トリスターノやリー・コニッツ、ズート・シムズやアル・コーンらの白人プレイヤーをフェイヴァリットにする人たちにとっては、たまらない魅力をたたえたセッションといえる。単純にゲッツとエヴァンスのプレイを頭に思い浮かべてみただけで、このふたりの共演が冷たい炎を飛ばす、クールでホットな(?)演奏になるにちがいないと期待してしまうのだ。が、果たして結果はどうであったのか。

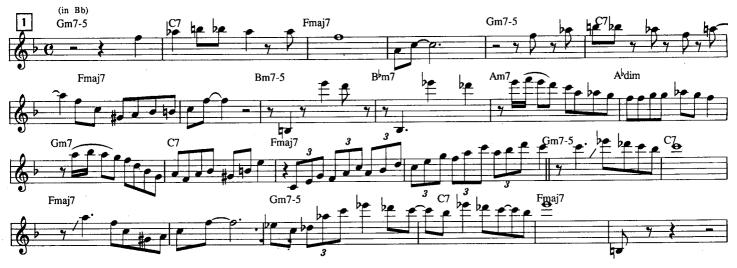
一言で片付けるには無理があるかもしれない が、良い演奏ではあるが、期待どおりという ほどの名演ではなかったようだ。たった一回 きりの共演で、おのおのの真価を発揮すると いうのはなかなか難しいことである。互いに リーダーとしての強い個性を持っているだけ になおさらだ。何度かセッションを重ねると いうことを経た上であったなら、また別の結 果になったであろう。このことは望むべくも ないが。これ以外にも、ベーシストとドラマ 一の人選ということも問題があったかもしれ ない。メンバーであるロン・カーターやリチ ャード・デイヴィス、エルヴィン・ジョーン ズらはまったく文句のつけどころのない名手 たちではあるが、このゲッツ~エヴァンスと いう白人プレイヤーたちのコンセプトにベス ト・マッチングするミュージシャンであった



『スタン・ゲッツ&ビル・エヴァンス』 (ポリドール CD:POCJ-1829)

ろうか。リズムのノリの点でもこのことはいえる。たとえばリチャード・ディヴィス~エルヴィン・ジョーンズのコンピは、『ヘヴィー・サウンズ』というアルバムにも代表されるように、重厚でそしてねばりながらも"うねる"タイプのグルーヴを表現している。一方、ゲッツ~エヴァンスは、タイトでジャストのノリでのソロを展開するタイプである。彼らのような白人ジャズ・メンの代表格プレイトの持ち味をほんとうに生かすのであるなら、チャック・イスラエルやエディ・ゴメス、ポール・モチアンらのような同じく白人プレイヤーを迎えた方が、一体感があったのではないかと思うのだが、いかがであろうか。

演奏自体に触れてみよう。この曲の持つム ードはゲッツのサックスのスタイルによくマ ッチングしている。メロディの唄い方、ニュ アンスのつけ方の巧みさからそれが伝わって くる。アドリブ時には8小節単位のブレイク タイムが効果的に使われているので、メリ ハリが大きいソロ構成になっている。そして CDには興味深いことに同曲の別テイクが追 加されているのだが、はっきり言って、オリ ジナルと比較してあまり良い出来とは言えな い。おそらくオリジナル・テイクを録音した あとに、それをキープしておいてもう1回、 くらいのノリで別テイクを録音したのだろう。 オリジナル・テイクの出来にとらわれてしま ったのか、覇気のない演奏だ。ソロの途中、 オリジナル・テイクにも使われていたフレイ ズとまったく同じものが唐突に出てくるのだ が、たぶんこのフレイズはあらかじめ用意し ておいたものだろう。ちょっと意外な感じが した。





★トランペット:マイルス・デイヴィス

## Miles Davis (tp)

#### ●解説:吉田憲司

### モードの発想と"グリーン・ドルフィン"

ジャズの発展の過程での大きな流れを見ると、そのひとつはラグ・タイムからニューオリンズのディキシーランド・ジャズへ、そして白人によるシカゴ・スタイルのディキシーランド・ジャズへと受け継がれ、やがてスウィング・ジャズへと発展している。

この過程において音楽は洗練され、商業音楽としては成功した。しかし、芸術的な面での成功はデューク・エリントンなどひと握りのミュージシャン達による音楽以外は少なく、ダンス音楽の域を出ることは稀だった。

第二次大戦が終わったニューヨークの、黒 人ジャズ・ミュージシャンによる新しい動き は"ビ・バップ"と呼ばれる新しい音楽を生 み出し、演奏会場をクラブやダンス・ホール からコンサート・ホールへと移し広げ、ダン ス音楽から鑑賞音楽へと脱皮させた。

パーカーやガレスピーのビ・バップは、バルトークやストラヴィンスキーらによる近代 和声論を取り入れながら、コードとコード進行を広げることで、フレイズを発展させた。しかし、この方法はより複雑なコードとコード進行へとエスカレートし、自由なフレイジングを束縛する結果となった。

このような新しいジャズの流れの中で、ビ・バップの洗礼を受けたトランペッターがマイルス・デイヴィスである。そして、マイルスは音楽的に大きく成長し、自分のスタイルを完成させ、多くの名演奏を残すだけでなく、

ビ・バップをさらに発展させる方法論を見つ け出し、成功させた。

最初に見せたマイルスの動きは、1948年秋に結成した9人編成のグループによる実験であった。ここで試みられた重厚なハーモニーと広い音域を駆使したサウンドによる演奏は、ユニゾン・メロディでジャム・セッションの延長のごとくいつも演奏されるビ・バップに対する批判であった。

次いで見せた動きは、アルバム『クッキン』の中の「ブルース・バイ・ファイヴ」のソロに見られるような"コードの中から音を選択する"のではなく、"全体のサウンドと調和するハーモニーとしての音の選択"である。そして、更にこのアイディアを広げていったのが"一定の旋法上で生じる音列から選択した音でメロディ・ラインを作る方法"であり、この方法を"モード奏法"と呼ぶ。

こうしたモード使用による演奏は、コードとコード進行の単純化により自由なメロディ・ラインによるアドリブの自由化であった。アルバム『マイルストーンズ』はこのような新しい考えによって1958年4月2日と3日に録音された。

続いて発表されたのは、7月4日のニューポート・ジャズ・フェスティヴァルのライヴ盤であり、さらに7月22日から8月18日はギル・エヴァンスとの共作『ポギーとベス』の録音を、翌年1959年3月から4月にかけては『カ



「1958マイルス/マイルス・デイヴィス」 (CBSソニー(CBS)CD:32DP-521)

インド・オヴ・ブルー』を、11月20日には名作 『スケッチ・オヴ・スペイン』を録音するなど、 エネルギッシュに活動する。

1958年から1959年の時期は、マイルスにとって音楽上の実験と完成とのはざまにあり、 演奏自体もスリリングである。

前置きが長くなってしまったが、今回取り上げる「オン・グリーン・ドルフィン・ストリート」は、このような時期である1958年5月26日に録音され、『マイルストーンズ』から『カインド・オヴ・ブルー』への実験の途中段階での演奏である。

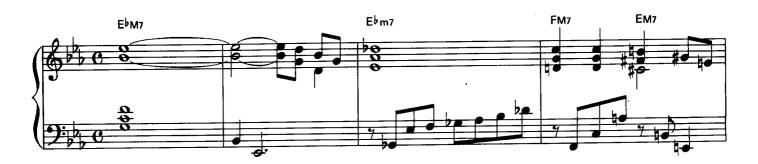
現在でも、この曲はよく取り上げられ、演奏の機会も多い。それは曲のコード進行のおもしろさであろう。例えば最初の8小節をFペダル使用にすることで、スケールの選択はより自由となり、続く $Gm_7/C_7 \sim F_\triangle$ 、 $B^bm_7/E^b_7A^b_\triangle$ はそれぞれにスケールを組み立てる。そして曲の最後8小節を $Gm_7/Gm_7$  on F、 $Em_7(^{(5)})/E^b_7$ 、 $Dm_7/Dm_7$  on C、 $Bm_7(^{(5)})/B^b_7$ 、 $Am_7/A^b_7$ 、 $Gm_7/G^b_7 \sim F_\triangle$ と II  $m_7/V_7$ を変化させることでクロマチック・コードが使用でき、フレイズを広げることができる。

スタンダードと言われる曲の中では、モードを使用するのに適していない曲も多いが、この「オン・グリーン・ドルフィン・ストリート」はそのような中でも、最もモードに適した曲かもしれない。

# Miles Davis (tp) & Bill Evans (p)

『1958マイルス』より

●採譜:及川かほる



# "On Green Dolphin Street"



段

演

新 $\cdot$  S 月 T 刊 A ス N タ D ン A タ R — D ド -Tp. solo (2コーラス目) Fm7 FM7 G/F **D**7 Gm7 **C**7 FM7 **C**7 AbM7 Gm7 B♭m7 Eb7 Fm7 FM7 Gb/F FM7 G/F D7 G7<sup>(</sup>69) Dm7 **A**7 Gm7 **C**7 Gm7 D7 **C**7 Gm7 D7 Am7 FM7 C7 Gm7 D7 Am7

# "On Green Dolphin Street"





# "On Green Dolphin Street"



# 名演探也.

# FLAMENCO SKETCHES MILES DAVIS

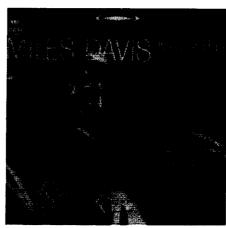
### 禁欲的なまでの歌い方こそ美しい

マイルス・デイヴィスの『カインド・オヴ・ブルー』である。あまりの名盤ゆえに"この名 演を探せ"でとりあげるのも、ちょっとばかり はばかられるが、CDで発売された(9月21日 発売)ことでもあるし、ここでその魅力を再確 認してみることにする。

このアルバムの売り文句にあるのが、マイルスの \*モード奏法の導入\*ということだが、アルバム全部がモード的であるわけではないことをいっておこう。例えばA②「フレディ・フリーローダー」はウィントン・ケリーのファンキーなピアノが魅力のブルースだし、「ブルー・イン・グリーン」もそのコード進行をながめるなら決してモードという言い方はできない。中で明らかにモードと言えるのは、A①の「ソー・ホワット」だ。DドリアンとE'ドリアンの繰り返しのうえでの演奏は、\*モード\*というもの

が単にスケールのことではなく、その演奏者に 新たな空間を与える、あるいは聴き手にそう感 じさせる力を持っているものであることが分か るだろう

そして今回とりあげた「フラメンコ・スケッチズ」だが、かなりクラシック色の強いオスティナートのうえでアドリブを繰り広げる、という内容で、モードといういい方も可能だが、特にモード、モードと大さわぎするほどのこともないようにも思える(これ以降のマイルスのモードの発展のさせ方を考えると、この曲のアプローチはモードという意味はそれほどない、ということ)。というわけで、ここではマイルス~コルトレーン~エヴァンスによる押えのきいたリリカルなソロにこそ耳を傾けてほしい。この美しさこそが、実はこのアルバムの最大の魅力なのだ。ということが分かってもらえると思う。



「カインド・オヴ・ブルー」 CBSソニー(CD:32DP513)







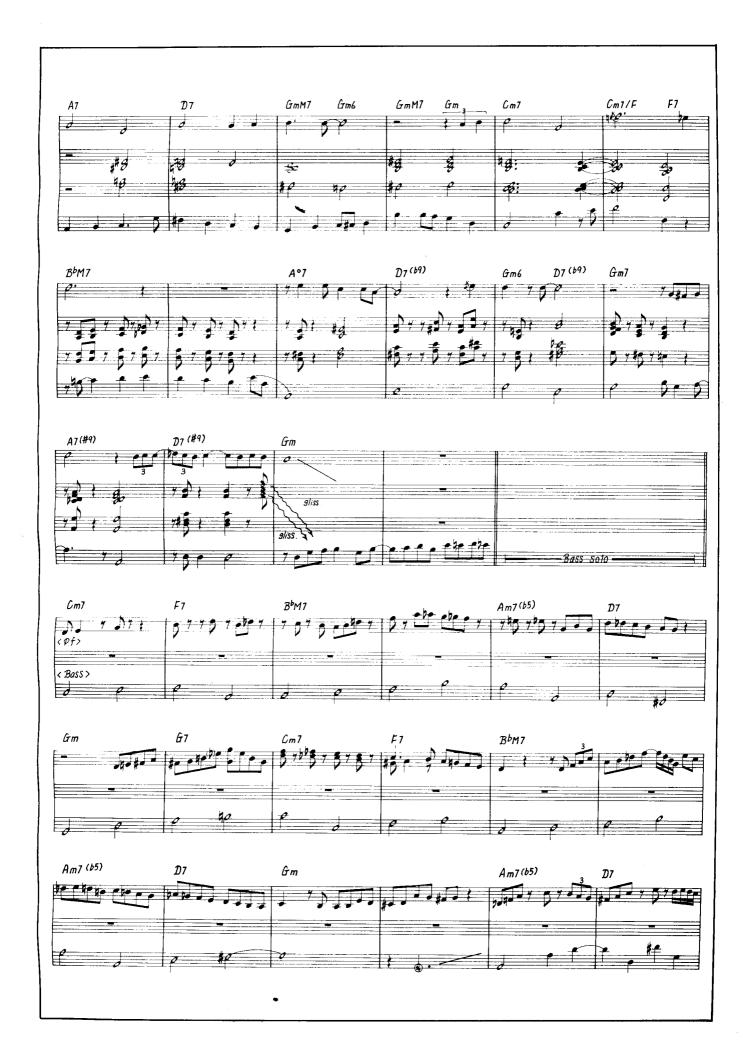
### 名演戏。 FLAMENCO SKETCHES MILES DAVIS





名演点探索!リクエスト募集





### 名演を探せ!

# Attumn Leaves Bill Evans



# You And The Night And The Music

あなたと夜と音楽と

Words by Howard Dietz/Music by Arthur Schwartz

















月~土11:00~19:30 日・祝 11:00~18:30 玄坂2-10-7 03-3476-5441 03-3476-5475 03-3476-5401 03-3476-5571

~ 10:00~21:00 · E 10:00~20:00 03-3409-2671

:庫です。

#272XXX #74XXX #183XXX #218XXX #320XXX #119XXX

夏も盛りを過ぎつつある今日この頃だ

が(といってもこの原稿を書いている今

は真っ盛り)、夏の定番「サマータイム」

をお届けしよう。言うまでもなく、ジョ

ージ・ガーシュウィン作曲のフォーク・

●パンドレン (A) (メタリ) AL(メタル) (メタル)

ン、トナリン、 シュガール(メ ゾル(メタル) バローン

スンを行っ 談下さい。 ラメンコギター

1111/62 ン実施中

入会金¥5,00 器レンタル**あり** 

は下記ま nha.co



ビル・エヴァンス(p)の名演 **「サマータイム**」

歌で、「夏の間は暮らしやすいよ。 魚は 飛び跳ねているし、綿の木もよく育って る、……だから赤ちゃんもう泣かない で」といった内容の、変型ブルースのよ うな子守歌だ。ヴォーカル、インストを 問わず、昔からジャズの巨人たちのほと んどが取り上げているが、中でもマイル ス・デイヴィスとギル・エヴァンス、 MJQのヴァージョンは美しくリリカル だ。対照的に、ジョン・コルトレーン・ ヴァージョンは寝た子も起きて泣き出し そうなアグレッシヴなインタープリテー ションで聴く者を圧倒する。さて、ビ ル・エヴァンスの演奏はどうだろう?

譜面を見てみよう。冒頭8小節はチャ ック・イスラエルのベース・ソロ。5小 

まで4コーラスのアドリブの後、5コー ラスにわたるペース・ソロは割愛し、区 の1コーラスのピアノ・アドリブまで掲 載している。この後はテーマに戻り、エ ンディングはAmワン・コードで32小節 のアドリブで終えている。

このアルバム「ハウ・マイ・ハート・ シングス!」は、セッションの中から歌 うような弾んだナンバーばかりが集めら れたものだけに、この曲も、右手はシン グル・トーンでシンブルだが、口ずさめ るようなフレイズがたくさんつづられて いる。ⓒの7~10小節目の1拍半フレ イズは、最初3度ずつ下降し、次にAm のコード・トーンを起点に上行していく 様がスリリングでカッコいい。 また、こ の曲におけるエヴァンスの大きな特徴と

「ハウ・マイ・ハート・シングスト ビル・エヴァンス ビクターエンタティンメント (Riverside) VICU-60308

とんど左手はF#-G#、つまり、fri M7thという動きをしていることだ。こ の動きは左手がコードを押さえる口幕 よび巨においてもずっと維持されてい る。また、各コーラスの11~13小節目 にかけてのコード感覚も斬新だ。









¥



#### MY FOOLISH HEART

Played by BILL EVANS



「ターン・アウト・ザ・スターズ 〜ハイライト」 ビル・エヴァンス・トリオ weaジャパン WPCR-917

ここからは、ビル・エヴァンス最 後のヴィレッジ・ヴァンガード・ラ イヴ・レコーディング・ボックス・ アルバム『ターン・アウト・ザ・ス ターズ』から1曲、ヴィクター・ヤ ングの名曲「マイ・フーリッシュ・ ハート」を素材にして、ビル・エヴァンスのピアノ・テクニックの真髄を研究してみよう。この曲は、右に紹介しているハイライト盤の2曲目にも収録されている。まだ未聴だという人はチェックしてみよう。











MY FOOLISH HEART: Words by Ned Washington / Music by Victor Young (c)1949 by CHAPPELL & CO., INC.
All rights reserved. Used by permission.
Rights for Japan administered by WARNER / CHAPPELL MUSIC, JAPAN K.K. c/o NICHION, INC.

採譜:河本芳子





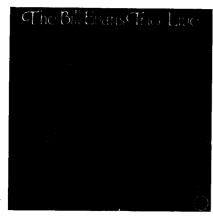




# 名演探せり

エヴァンスのリラックス・ライヴより

## BILL EVANS ROUND MIDNIGHT



ビル・エヴァンスの本当にリラックスしたライヴ盤
『ラウンド・ミッドナイト』からタイトル曲をおとどけしよう。
このアルバム、他にも「ナルディス」 や「いつか王子様が」など、
エヴァンスではおなじみのナンバーがおさめられているのだが、
それらがみんな渋ーい味わいを放っているのだ。
超名演とはいいがたいが、逆にビル・エヴァンスの変わらぬ良さがあり、
また、エヴァンスのヒアノを勉強するにあたっては格好の素材だと思われる。
いろんな「ラウンド・ミッドナイト」と比べながら勉強してほしい。

「ラウンド・ミッドナイト』ポリドールJ33J-25053(CD)





#### 名演》探也/ BILL EVANS ROUND MIDNIGHT



## 名演探也!

エヴァンスの未発表ライヴよりしっとりバラッド

## BILL EVANS GOODBYE



ビル・エヴァンスの未発表ライヴ盤が ビクター音産より12月16日発売されることになった。 69年録音で、エディ・ゴメス、マーティ・モレルの面々である。 どの曲もエヴァンスではおなじみのものばかりなのだが その中から、バラッド「グッドバイ」をおとどけすることにしよう。 最近ではウィントンもとりあげたりした名曲だが、 エヴァンスのハーモニーの美しさはこのテイクでも極立っている。 内声の動きなどに注意しながら、弾きこんでほしい。

『枯葉~ビル・エヴァンス・トリオ・ライヴ・アット・モンマルトル』 ビクター音産 VDJ-1118



#### 名演。探<sub>世</sub>/ BILL EVANS GOODBYE





主11:00~19:30 第 11:00~18:30 E 2-10-7 3476-5441 3476-5475 3476-5401 3476-5571

10:00~21:00 10:00~20:00 3409-2671

#272XXX #74XXX #183XXX #224XXX #224XXX #218XXX #320XXX #119XXX

先月に引き続き、今月もビル・エヴァ

**ンスでいこう。先頃発売された『ビル・** 

エヴァンス・ソロ/ワルツ・フォー・デ

ビー」には、リバーサイド・レーベルに

残してきた1956年から63年にかけての

です。

/ン●ブリル (タル) ●セ

ガオ

新開講!

は下記まで 557 -shibuya/ ha.co.



ビル・エヴァンス(p)の名演

#### を研究しよう

いる。この時期というのはエヴァンスの 活動の中の非常に重要な時期で、初リー ダー・アルバム「ニュー・ジャズ・コン セプションズ』を発表したのが56年、マ イルス・デイヴィス・セクステットに参 加したのが58年、独立してスコット・ ラファロ(b)、ポール・モチアン(ds)との トリオで不朽の名盤『ポートレイト・イ ン・ジャズ』を発表したのが59年、とい ったように、デビュー間もない頃から、 **・罐ジャズ・ピアノ界の寵児となってい** く過程にあたっている。

ではこのアルバムの中から、おなじみ のアイルランドの名曲「ダニー・ボーイ」 を取り上げてみよう。この演奏で珍しい のは、通常のジャズのやり方と違って、 テーマ部分を何度も何度も繰り返してい ることだ。クラシックに「変奏曲」という

形式があって、これはひとつの主題(テ ーマ)のメロディ、ハーモニー、リズ ム、キーなどをいろいろ変化させていく つかの曲をならべていくものであるが、 これにならったのかもしれない。譜面を 見てみよう。原曲は16小節で1コーラス が構成されているが、ここでは全編ソ ロ・ルバートなので、読みやすいように 便宜的に小節線を切っている。そのため 16小節構成にはなっておらず、ひとつの リハーサル・マークの間を1コーラスと して見てほしい。誌面の都合上4コーラ ス目の途中までの掲載であるがすべてテ ーマの変奏で、キーはコーラスごとに、 Bb→B→F→Bbと転調しており、また 各コーラスそれぞれ細かなリハーモナイ ズがされている。Aの3小節目3拍目な どのような、コードの変わり目のちょっ



「ワルツ・フォー・デビィ〜ビル・エヴァ ンス・ソロービル・エヴァンス ビクターエンタテインメント (Riverside) VICJ-60950

とした内声の変化はいたるところに見ら れるし、 🛭 15小節目や17小節目のよう に、同じコードの中での変化も多い。ジ ャズ・ピアノの新しい歴史を切り開いた エヴァンスの繊細なプレイをじっくり研 究してみよう。

〈採譜:河本芳子/解説:北原英司〉



### アタ'ニー・ボーイ」 DANNY BOY played by BILL EVANS (⊳)







3

1 2

e



初プマ充木・\*\*\*\*\*\*



1969年のビル・エヴァンスの名ソ ロ・アルバム「アローン」から、「ネヴァ ー・レット・ミー・ゴー」を採譜した。 記憶にあるはずがないのになぜか懐かし い気分にさせる、"エヴァーグリーン"で ありながら、追憶の響きがするという、

叮子

陂彦

名\_

-徳

\EI

DMP.

rums)

哉

ET 雅之

团):

手 い。 OL

<del>分</del>)

3 jp

### NEVER LETMEGO [ドル・エヴァンス(p)の名演「ネヴァー・レット・ミー・ゴー

#### エヴァンス・ソロ演奏の"エヴァーグリー

またしても音楽の魔力である。[A]から[Ğ] まで3コーラス半の採譜で、作り込んだ 共通部分と真の瞬間即興部分をじっくり と観察できるだろう。アレンジは明晰 で、弦楽四重奏のように内声や低声のラ インが充実していて、独りアンサンブル の趣きがある([A]の14小節目の左手のメ ロディや①の4小節目の小ワザ的な低音 が、メロディを補って歌っているのに注

ここには、いわゆる"唄もの"をバラッ ドで弾く時のヒントが多く見出される。 例えば、□冒頭の左手の半音階的なクリ シェは、10度の枠組みの中で柔らかくポ ジションを変えることで奏でられる。手 の大きな向きには最適だろう。その他美 しい配置が多くあり、[B]の2小節前の Dmaj7のコードの配置など、これ以外考

えられないくらい力強い豊かな響きがす る。Aの7小節目、Bの5小節、Cの 11小節目などの メジャー7thコードで よく使われている、6thと7thの「ゆれ」 で響きをほかす、いわゆる"印象派風"の 効果が美しい。"印象派風"といえば国の 1小節前などに見られるブロック・コー ドのさんざめくような色彩感覚、内声の 閃きといった"エヴァンス派"の技法(画 法?)も忘れてはならない。

匡の10小節目からはノン・ストップ のメロディの舞いが見られる。清流のよ うに止め処なく流れるようなラインだ が、分析すると、パッセージはそれぞれ 明確な意思と方向性を持って最適な配置 のコード・トーンをめがけて舞い降りて いるのが確かめられる。匠の1小節前か らのラインの終わりがコード・トーンC



「アローン」 ビル・エヴァンス ニバーサル クラシックス&ジャズ UCCU-5021

に終止している一方で、主メロが他の声 部から始まっていて、やはりアンサンブ ルしている。こうした演奏はジャズ・ピ アニストにとってはそのままいい教科書 であるが、こんなに美しい教科書もまた とないものだ。

〈採譜&解説:鈴木一司〉



## 「ネヴァー・レット・ミー・ゴー」 **NEVER LET ME GO** played by BILL EVANS (p)







## 「ネヴァー・レット・ミー・ゴー」 **NEVER LET ME GO** played by BILL EVANS (p)

